



【ともだち in 名取の活動】

- 支援の始まり・・・海外出身の移住者や滞在者を含む名取市民の共生支援や、日本語教室の運営、市民との多文化交流事業による双方向の学び合いの場作り等をしてきた国際交流協会ともだち in 名取(会長 相沢喜美)※以下ともだち in 名取は、震災の5日目から地元名取市で被災者支援の活動を始めました。「これまでのマイノリティ（社会的少数派）への支援の経験を生かした寄り添った形で支援をしました。『私たちに手伝えることは何でもします』と、市役所の担当課に申し出て、名取市立第1、第2中学校の避難所でボランティアのコーディネーターや、物資の仕分け、傾聴などの支援を始めました。
- ともだち in 名取のメンバー・・・毎日欠かさず誰かが避難所に通い 回を重ね、家族や家を失った悲しみ、働く場の無くなった不安などを話すまでになって来た避難者から多く学びました。礼服がない方々のために県外の団体などと繋いで二千着の礼服を提供し、感謝されました。そのほかにも、企業からの提供を受けて、丸井衣料品お楽しみバザー（無料で衣料品を買い物形式で物資提供）等を実施しています。
- 気になること・・・津波は大切な命、財産と共に大家族という名取市に残っていた素晴らしい文化まで押し流しました。学童を持つ世代と故郷から離れがたい高齢者とを引き離すこととなったという傾向も仮設住宅暮らしに見られます。

【自立支援を意識しながらの支援】

- 仮設住宅に暮らし始め、家に閉じこもらないことが大切と考え、支援している他の団体や企業などと協力し、状況に合わせて支援の形を変えてきました。まず、西本願寺東北教区災害ボランティアセンターさんと協働でお茶っこのみを展開し、孤独対策を展開しました。甘いお菓子で心をとかし、会話で笑顔を増やす、そして歌から元気が湧きます。仮設住宅内のコミュニティ作りへの支援として、足湯やマッサージ・散髪などのサービス、寿司トラック、子ども対象のマジック、お好み焼きワークショップなど幅広く良いと思えるものを実施し、支援が偏らないように配慮し、仮設名を指名して支援希望の申し出にも、状況を説明し支援者と指名された自治会のご理解を得て、支援の薄い仮設へ配置しました。そのほかにも、企業からの提供を受けて、丸井の無料で衣料品を買いもの形式で提供支援等を開催したほか、支援を希望する個人や団体、企業などと被災者を繋ぎ、手芸教室、出張居酒屋等を実施したが徐々に自治会による運営に移行しています。
- 支援活動を続ける中で、行政からの委託も受けるようになり『応急仮設住宅周辺環境調査』もしています。また県では備蓄の支援物資を被災者に届けるため、民間の支援団体に物資の配布を委託しており、仙南地域はともだち in 名取が担い、夏から名取市閑上の上町集会所で開いている閑上まちカフェで毎週水曜日、配布しています。民間のアパートの借り上げ住宅で生活する人々には、支援物資がなかなか行き届いてないことから、民間に暮らす被災者を対象に生活用品などを配布しています。現在、名取市だけにとどまらず県北への配送手続きもし、今後も形を変えながら必要な支援を続けています。

1 被災地の外国人を 支援する取り組み



国際交流協会 ともだち in
名取 事務局長
[宮城県名取市]
わかやま ようこ
若山 陽子 さん

同じ「地球市民」としての共生を めざす

「国際交流協会 ともだち in 名取」は、平成19(2007)年4月16日に発足したボランティア団体です。海外出身の移住者及び滞在者の方々と市民の交流を通じて、双方向で異文化を学びあい、同じ「地球市民」として共生していくことを目的に活動しています。

名取市では、正規に外国人登録をしている方は約300名、その多くが日本人との結婚を機に、韓国や中国から来日した女性たちで、まだ日本語を上手に話せない方もいます。

私たちの活動には大きく3つの柱があります。医療機関の受診などを日本語通訳で支援する「共生支援」(ちょっこらたすけ隊)と、「日本語講座」(にはんごまなび隊)、互いの文化を学びあって、一緒にできることを探していく「多文化共生」(ともだちつくり隊)の活動です。また、学校や公民館に、国際理解教育に外国人の方が講師として活躍できるよう働きかけるなど、社会参加のきっかけづくりも行っています。

外国人の方を孤立させない取り組み

日本語教室をしていると、外国人の



韓国の文化(遊び)を子どもたちに紹介

方からさまざまな困り事、相談事が寄せられます。身近な地域に相談窓口がなく、県の相談窓口では地域の詳しい状況までは分からないため、私たちの携帯電話を教えて、いつでも連絡が取れるようにしています。

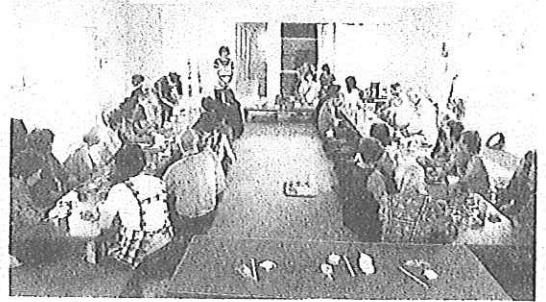
日本人と同じように外国人の母親も育児ノイローゼになる場合があります。私たちは、会員の元看護師や保健師を中心に、頻繁に訪問するなどして孤立させないよう支援しています。また、日本語教室以外に、「遠足」の機会を設け、境遇の近い仲間同士が気兼ねなく話すなどして気分転換できる機会を提供しています。

避難所における支援

震災直後には、多くの国では、母国から帰国命令が出たものの、自分には介護をしている姑さんと子どもがいるからと、日本に残ることを選んだ方が多くいました。私たちは関係者の安否を確認した後は、名取市社協とも連携して5月27日まで避難所の運営支援を行っていましたが、避難所には、外国人の方も地域の方々と一緒に入っていました。そこで、言語の違い、文化の違いによる誤解や疎外感などが生じないように、配慮しながら支援を行ってきました。例えば、外国人の方が「自分は文化が異なり、言葉も通じにくいから」迷惑だろうと考え、調理の仕事ではなく、違う仕事を担当しようとした場合も、その真意が伝わらずに、「自分で好き勝手に仕事を選んでいる」と誤解されてしまう場合などがあるのです。

仮設住宅等での支援

避難所での支援だけに留まらず、ご主人を亡くされた方の公的手続きの手助けや、子どもを抱えて地域で孤立している母親のための支援など、外国人の方が抱えるさまざまな困り事に対応してきました。



仮設住宅での「お茶っこ飲み会」の様子

現在は、市社協とも連携して、市内8か所の仮設住宅のなかで「お茶っこ飲み会」という場を設けています。ここでは、例えば、餃子づくりを中国人の方が教えるなど、外国人の方が講師の立場を担っています。

仮設住宅の方とは、被災後継続しておつきあひし、積極的に声を掛けるようにしています。避難所から仮設住宅に移ると、周囲との交流が少なくなりがちですので、心の通う支援をすることが大事と考えています。

このたび、市社協で新たに仮設住宅の生活支援相談員を雇用することとなりましたので、私たちは今後、自宅避難者やアパート避難者を重点的に支援していきたいと考えています。

外国人の方々に多くの笑顔ができるように

地域で暮らす外国人の方たちは、「自分たちに声を掛けにくいのだろうけれども、気軽に声を掛けてみてください」ということをよくおっしゃいます。ですので、日本の人に1回声を掛けるところを、外国人の方に対してはぜひ2回は声を掛けてほしいと思っています。

また、地域にある日本語講座とも接点をもってもらえたらと思います。例えば、お茶菓子を提供するなど、ちょっとしたことで、その後のつながりが生まれると思います。

今後も、日本に住む外国人の方々に、少しでも多くの笑顔が生まれるよう、一日一日を大切にしながら活動を続けていきたいと思っています。